

パパーニンの北極漂流生活とその文学的表象

岩本和久

●要約

スターリン時代の文学的空間において、英雄はしばしば、「偉大なる家族」の「息子」として表象された。本論では、北極での調査によって英雄とみなされることになったパパーニンについて、同時代の文学的テキストの中で、いかに表象されているのかを再検討する。

パパーニンは北極の氷上で10ヶ月間生活し、周囲の環境の調査を行った。過酷な環境から無事に帰国した彼は、英雄として賞賛されることとなった。

イサコフスキイの詩「4人の同志」では、パパーニンが「同志」として提示され、国民との連帯が強調されている。一方、パパーニンを含む国民と向き合っているのは指導者であり、危機の際には指導者から救いの手が差し伸べられるとされる。

ヴィシネフスキイのパパーニン伝では、北極調査よりもむしろ、国内戦に参加したというパパーニンの経歴が強調される。北極調査というユニークな経験はそこで、革命に鍛えられた若者というソヴィエトの神話に変えられてしまう。

●キーワード

パパーニン

イサコフスキイ

ヴィシネフスキイ

ソヴィエト文学

スターリニズム

はじめに

スターリン期のソ連が、一種の巨大な家族として表象されていたことは、しばしば指摘されることである。たとえば、カテリーナ・クラークによるソヴィエト文学論は、家族の神話をその基礎としている。

社会主義リアリズム小説の中心には、スターリンの政治的文化の中心と同様、「偉大な家族」の神話が存在する。この神話は、血のつながりによる「小さい家族」の構成員と同様の暖かさや心配といった感情を互いに抱く、国民の自然な連帯として、国家という「偉大な家族」を表象するものである⁽¹⁾。

クラークはその『ソヴィエト小説』において「偉大な家族」の神話を検討する際、「息子」の役割を演じる者として、スタハーノフ運動の参加者の他、国境警備兵、スキーヤー、ヴァイオリニスト、登山家、パラシューティスト、飛行機パイロットを挙げている⁽²⁾。

飛行機やスキーといった英雄的な要素を伴いながら、スターリン時代に英雄として賛美されたのが、北極の調査を行ったパパーニンであった。飛行機で北極に赴いた彼は、氷上で生活を行い、スキーに乗って環境の調査を行ったのである。

本論では「偉大なる家族」という主題を念頭に置きながら、同時代に執筆されたパパーニンに関する文学的テキスト、特にイサコフスキイの詩「4人の同志」と、ヴィシネフスキイによるパパーニン伝について分析し、スターリン期における英雄の表象の在り方について、再検討してみることとする。

1. パパーニンの漂流生活

イヴァン・パパーニン(1894-1986)と3人の同志は1937年5月から38年2月にかけて、北極圏での274日間に及ぶテント生活を敢行し、ソ連の英雄となった。

北極探検の歴史の上でよく知られているのは、19世紀後半から20世紀初頭にかけてなされた数々の試みである。

ノルウェーのフリチョフ・ナンセンは、1893年から96年にかけて、帆船フラム号で北極圏を漂流している。この漂流生活は北極圏における海水の動きを解明するという一大成果をもたらしたが、北極点に到達するという目的を達成することはできなかった。

北極点への到達に成功したとされるのは、アメリカのロバート・ピアリーである。1909年のことであった。この出来事の結果、探検家ロアール・アムンセンや白瀬矗は南極を目指すこととなる。

1928年にはイタリアのウンベルト・ノビレが飛行船に乗って北極点に到達したものの、遭難してしまふという事件が起こっている。人類初めて南極点に到達したアムンセンがノビレ捜索に向かったものの、消息を絶ってしまったというのも、この時の出来事である⁽³⁾。

パパーニンの北極調査は、これら先駆者の試みと共通点が多い。

ノビレは飛行船で北極点に到達したが、パパーニンらは北極点から約20キロ離れた地点に飛行機で到達している。

その後、彼らは北極の氷上に仮設テントを設け、そこで生活を始めた。彼らの計画のユニークな点

は、それが漂流であったということにある。北極海の氷は動いているため、パパーニンたちはテントにじっとしているだけで、どんどんと南下してしまうのだ。

漂流という試みは、ナンセンのフラム号とも共通するものだ。氷に閉じ込められたフラム号のナンセンは、氷の動きと共に北上したが、パパーニンたちは北極点から南下を続けたのである。

南下するにつれ、氷は溶けてしまう。10ヶ月の生活の後、パパーニンたちの暮らす氷にも亀裂が入り、彼らは遭難の危機にさらされることとなった。やがて、ソ連から3隻の船が派遣され、彼らを収容した。

ソ連に帰国したパパーニンたちは、まず北方の町レニングラードで、次にモスクワで大歓迎されることとなった。パパーニンを迎える人々は沿道を埋め尽くし、紙吹雪を投げかけた。

パパーニンたちの暮らした観測所は、「漂流ステーション『北極』」と命名された。その後、ソ連は同様の観測所を北極海に次々と、設営するようになったため、パパーニンたちの観測所は現在、「北極1号」と呼ばれている。

北極圏での天候、海の深さ、生物の状況、そして海水の動きについて、パパーニンたちは調査を行った。また、彼らは母国であるソ連はもちろんのこと、世界各地と無線による交信を行っているが、これには生存の確認、あるいは北極圏での生活という国家的プロジェクトの宣伝といった意味の他、北極圏の厳しい天候下での無線連絡の実験という目的も認められるだろう。

パパーニンらは新聞を始めとするソ連のメディアに、北極圏からメッセージを送り続けた。こうした宣伝の手法は、たとえば、紅白歌合戦における昭和基地からの電報や中継、あるいはスペースシャトルからの中継を思わせる、メディア史的にも興味深いものでもある。

北極圏での生活について記したパパーニンの日記『氷上の生活』は、2度、日本語に翻訳されている。パパーニン『北極探検記』（竹尾弼訳、聖紀書房、1942年）と『パパーニンの北極漂流日記』（押手敬訳、東海大学出版会、1979年）だ。前者は『氷上の生活』第2版、後者は『氷上の生活』第6版を底本としているが、両者の間にはいくつかの異同を見出すことができる。スターリン批判後の1970年代に刊行された後者では、スターリンの名前や当時なされていた生産性向上の運動「スタハーノフ運動」への言及が消されているのだ。

スタハーノフ運動への参加者は、当時、英雄とみなされていたが、パパーニン隊の無線技師クレンケリも『氷上への生活』の中で「極地スタハーノフ運動者」として紹介されている。

パパーニンが北極で暮らした1937年は、スターリン体制にとって記念すべき年であった。この年、ロシア革命20周年が祝われ、スターリン憲法にもとづく選挙が実施されたのである。

パパーニンたちの北極生活も、それらのイベントに組み込まれることとなった。彼らは北極での祝賀の様子を伝えるよう、新聞に要請された。さらに選挙の結果、彼らは最高ソヴィエト議員に選ばれることになった。

1937年から38年にかけては、トハチェフスキイやブハーリンが逮捕、銃殺されるなど、「大粛清」の嵐がソ連で吹き荒れた年でもあった。粛清の恐怖をこの時代の闇の面とするならば、パパーニンたちの活躍はそれら闇を覆い隠す光として、機能していた。当時、『プラウダ』特派員として活動していた、シナリオ作家オスカル・クルガノフは、パパーニンを取材した経験について次のように語っている。

あるいは、パパーニンという人が率いた極北探検隊が遭難し、救出隊にくっついていて、本まで書いた。結果的に彼らの英雄的行為を賞賛するのにひと役買ったわけです。しかし、この時期、大衆の耳目を集める派手なイベントの陰で、粛清が進行していたのです。スターリンはいつも、ブハーリンの裁判のようなときには何か他のイベントをぶつけ、世間の関心が粛清に向かわないように巧妙に仕組みました⁽⁴⁾。

2. イサコフスキイ「4人の同志」

パパーニンらの偉業については『プラウダ』を始めとするソ連の新聞で大きく報じられ、記事の傍らにはパパーニンを讃える詩が添えられた。そうした詩の作者として、たとえばヴァシーリイ・レベジェフ＝クマチ (1898-1949) やミハイル・イサコフスキイ (1900-1973) の名を挙げることができる。レベジェフ＝クマチは映画『サーカス』(1936)の主題歌「祖国の歌」の作詞家として、イサコフスキイは戦時歌謡「カチューシャ」や「ともしび」の作詞家として知られている。いずれもスターリン時代を代表する、大衆的な詩人である。

パパーニンがモスクワに凱旋した1938年3月の『プラウダ』紙は、18日付にイサコフスキイの詩「4人の同志」を、19日付にレベジェフ＝クマチの詩「パパーニンたちの歌」を、それぞれ掲載している。イサコフスキイ「4人の同志」の詩は、次のようなものだ。

«Четыре товарища»

В седом океане, в полярной пустыне,
От края родного вдали,
Четыре товарища жили на льдине
У самой вершины Земли.
И там, где роятся лишь ветры да вьюги,
Где ночи, как смерть, холодны,
Несли они знамя советской науки
И гордую славу страны.
Вода бушевала у них под ногами,
Ломался обманчивый лед.
Метель засыпала палатку снегами,
Но люди стремились вперед.
Мечту вековую они превратили
В простую и ясную быль.
Кремлевские звезды им всюду светили
На многие тысячи миль.
И знали герои, что если нагрянет
Угроза в суровом краю –

Сквозь бури и штормы им Сталин протянет
Надежную руку свою!

Сквозь бури и штормы, в далекие воды
Послала страна корабли.
Встречайте, колхозы, встречайте, заводы,
Героев Советской земли! (5)

「4人の同志」

故郷から遠く離れた
白い大洋の中、北極の荒地の中
4人の同志が氷上で
地球のてっぺんで暮らしていた。

風と吹雪だけが舞い
夜が死のように冷たいその場所で
彼らはソヴィエトの科学の旗と
国家の誇り高き栄光を担っていた。

彼らの足下で水は荒れ狂い
人を欺く氷は砕けた。
吹雪はテントを雪で覆うが
人々は前へ前へと急いだ。

幾世紀にもわたる夢を彼らは
単純明瞭な現実へと変えた。
クレムリンの星はどこであろうと彼らを
数千マイルを隔てて照らしていた。

英雄たちは知っていた。
厳しい土地で脅威が現れようと
嵐や暴風の向こうからスターリンが
その希望に満ちた手を差し伸べるだろうと。

嵐や暴風の向こうから、遠い海へと
国家は船を派遣した。

コルホーズよ、迎えよ、工場よ、迎えよ、
ソヴィエトの大地の英雄たちを。

この詩において、パパーニンたちは英雄であると同時に、「同志」として提示されている。だからこそ、コルホーズで働く農民や、工場で働く労働者は、「同志」の帰還を祝わなくてはならないのだ。連帯する「同志」の空間を見つめているのが、スターリンだ（「クレムリンの星はどこであろうと彼らを／数千マイ

ルを隔てて照らしていた」)。国民と指導者は向かい合う関係にあり、国民の危機にあつては、指導者は救いの手を差し伸べるだろう。

北極のパパーニンたちは、国民に迎えられる。その意味で、パパーニンたちは国民と向き合う関係にある。だが、パパーニンをも国民をも見つめ、彼らすべてと向き合っているのはスターリンだ。その意味では、パパーニンたちは国民の一部であり、国民と共にスターリンと向き合っている。イサコフスキイの詩は、パパーニンの帰還という国家的行事に際し、そのような図式を提示している。

このような図式を提示された読者は、テキストの主人公である英雄に共感を寄せることになる。読者はパパーニンたちを自らの同志とみなし、自らと同じ性質を付与された国民であると認めるだろう。

ヴィシネフスキイによるパパーニンの伝記にも、そうした傾向を読み取ることができる。

3. ヴィシネフスキイのパパーニン伝

フセヴォロド・ヴィシネフスキイ (1900-1951) は、スターリン時代に活躍した劇作家である。第1次世界大戦、ロシア革命、国内戦と激動の時代を戦火の中で過ごした彼は、1920年代から従軍経験をもとに執筆活動を始めた。

1929年の戯曲『第1騎兵隊』の成功は、彼の名を世に知らしめることにつながった。1930年代初頭には、ソ連を代表する演出家のメイエルホリドとタイエロフが、それぞれ『最後の決戦』(1931)と『楽天的悲劇』(1933)を演出している。

その後、第2次世界大戦が始まると、ヴィシネフスキイは従軍し、1944年以降は代表的な文芸誌『ズナーミャ』の編集長になっている。スターリン時代の文壇で活躍した彼は、スターリンの死よりも早く、1951年にこの世を去った。

ヴィシネフスキイによるパパーニンの伝記『ソ連英雄イヴァン・ドミートリエヴィチ・パパーニン』は、パパーニンが北極から帰還した年である1938年に刊行されている。パパーニンをめぐる一大キャンペーンの一環と考えられる時期である。

ヴィシネフスキイがこの本を執筆することになったのは、国内戦において彼がパパーニンの部隊に所属していたからであろう。ヴィシネフスキイは、パパーニンを個人的にもっともよく知る作家だったのだ。

ヴィシネフスキイのパパーニン伝を読んで驚かされるのは、文章の大半(全体の3分の2程度)が内戦の記述に充てられており、北極調査の記述が少ないことである。北極の氷上で行った活動についても、ごく簡潔に語られるだけだ。この伝記を読む限り、パパーニンが英雄になったのは、北極を調査したからではない。国内戦の経験で鍛えられたから、北極調査にも耐えることができたのである。

同志スターリン、我らが政府は北極での越冬計画を承認し、活動が開始された。この仕事に着手したのはパパーニン、戦闘の中で鍛えられたボリシェヴィクだった(6)。

内戦の記述が多いのは、ヴィシネフスキイの創作スタイルに対応するものでもあった。彼は国内戦の経験をもとに、作品を執筆していたのだ。批評家ペルツォフは次のように述べている。

フセヴォロド・ヴィシネフスキイはその全生涯にわたって、自らの主人公たちと緊密に結びついていたが、歴史は彼らを、1914-17年の帝国主義戦争から国内戦に至るロシアの変容の参加者、創造者としたのである(7)。

だが、国内戦の回顧とは、単なる一作家の創作方法にとどまるものではないだろう。そこには社会的な意味も認められるはずだ。1905年革命、第1次世界大戦、2月革命、10月革命、国内戦というほぼ20年に及ぶロシアの激動を経験した読者は、過去の回顧の中に自らの姿を読み取ったはずである。イサコフスキイの詩はパパーニンたち英雄と、読者である国民を同じ立場に置いているが、ヴィシネフスキイが語る国内戦も同様に、「われら」の物語として読みうるものなのだ。

北極におけるパパーニンたちの活動が詳細に語られないのも、そのためである。科学者パパーニンではなく、国民パパーニンが描かれなければならない。したがって、パパーニンたちが行った特別な活動ではなく、「われらと共に」彼らが行った活動が強調されることになる。

その一つがラジオや無線による交信だ。パパーニンたちは無線により自らの状況をソ連国民に伝え、ラジオを通してソ連の状況を知ろうとしていた。ラジオや無線により、ソ連と北極がつながれていたのだ。こうした一体感の感覚は、ロシア革命20周年の記念日にクライマックスに達することとなる。パパーニンたちは北極の氷の上で、4人だけのパレードを行ったのだ。

ラジオが彼らをソヴィエト国家に結び付けていた。彼らは数百万の人々に語りかけ、自らの科学的観察を伝え、仕事や生活について話したのだ。

ラジオは彼らに、我々ソ連の生活のあらゆる事件を伝えた。

偉大なる社会主義革命の20周年の日、彼らは我々と共に赤の広場にいたかのようだ(8)。

ヴィシネフスキイの語りの中で、パパーニンの偉業はソヴィエト文化の神話的物語との類似を強調され、国家全体を覆う、一つの大きな物語の中に吸収されていく。

たとえば、国内戦についての記述では、パパーニンが機械を修理するエピソードが繰り返し語られることとなる。

装甲列車は修理されなければならなかった。パパーニンは仕事を知っていた(9)。

東風は駆逐艇を捕らえ、敵の艦艇が行き来しているクリミアの岸边へと運んだ。エンジンを直さなければならない！それに着手したのは、パパーニン自身だった(10)。

機械を修理するエピソードは、ソヴィエトの小説や映画で繰り返し語られたものだ。ソヴィエトの文化空間では機械が動けなくなる場面が繰り返し提示され、英雄的な主人公である技師がそれを修理していった。

ヴィシネフスキイのパパーニン伝の中では、部隊の指揮官であるパパーニン自身が、装甲列車や船の修理を行う。軍人であると共に技師である主人公が、修理という英雄的な活動を行うというこのエ

ピソードは、きわめてソヴィエト的な、神話的な主題と言える。それはソヴィエトの読者に既視感や共感、自らの文脈との一体感をもたらすことになる。

ヴィシネフスキイはパパーニンの伝記を書くにあたり、その幼年時代から筆を起こしている。クリミアの港町セヴァストポリに生まれた少年が、いかに鍛えられ、国内戦や北極の寒さに耐えうる英雄となったかが語られねばならないのだ。

若者は健康に成長し、肩幅が広く、胸板が厚くなった。

〔中略〕

——若者は階段を下りた——黒海の船のための精密機器の工場に、機械工場に入るために。

若者は鋸をつかんだ。毛が逆立った……。だが、彼は叫ばなかった。歯をくいしばって、作業を済ませると、鋸を運んで、置いた。火傷した手をポケットに突っ込み、氣取っているかのように立っていた⁽¹¹⁾。

火と金属によって鍛えられ、英雄と化す少年——彼はあたかも、ワーグナー『ニーベルングの指輪』のジークフリートのようだ。こうした叙事詩的なイメージは、ソヴィエトの文化空間においては、ロシアの英雄叙事詩「ブイリーナ」の豪傑たちのイメージと結合することとなった。

ソ連において自分たちが、イリヤ・ムロメツなど「ブイリーナ」の豪傑にたとえられていることを、北極で暮らすパパーニンたちも知っていた。パパーニンの日記（12月16日）には、次のように記されている。

クレンケリはずっと、私たちに來た祝電を受信している。私たちをナイト、豪傑、英雄とも呼んでいる……。私たちは笑う。私たちのどこが豪傑だ!?私の身長は161センチなのだ……。私たちの中でいちばん背が高いのはクレンケリである。それでも私たちは役どころを決めた。クレンケリはイリヤ・ムロメツ、シルショフはアリョーシャ・ポポービッチ、フォードロフはソロビエ〔ソロヴェイ〕・ラズボイニクという名をもらい、私はというと、ルスランおよびリュドミーラと名づけられた⁽¹²⁾。

一方で、鍛えられる子供や若者という神話的イメージは、20世紀初頭のロシアの歴史と強く結びついている。それは1905年の革命と1917年の革命を通して、成長した世代の物語なのだ。

子供の目の前を1905年が過ぎていった。〔中略〕叫び声がある。「もし死ぬのなら、冷酷な士官の手や日本人の手にかかって死ぬのではなく、自由なロシアのために命を捧げよう」⁽¹³⁾。

ヴィシネフスキイのパパーニン伝には、このような文章がある。貧困の中に生まれながら、革命をくぐり抜けて成長した子供たち、それはオストロフスキイ『鋼鉄はいかに鍛えられたか』（1932-34）や

カターエフ『孤帆は白む』(1936)といった、1930年代のソヴィエト小説に共通する神話的な物語である。

自らが「ブイリーナ」の豪傑と同一視されることには当惑して見せるパパーニンも、革命をくぐりぬけた子供たちという物語を共有することには、なんらのためらいも示さない。北極生活の日記(1月6日)にパパーニンは、『孤帆は白む』を思わせる次のような文章を記している。

モスクワの学童たちが、組合会館の円柱ホールで新年を迎えたようすを、ラジオで放送した。私は、みじめだった自分の幼年時代を思い出した……。私たちは皆、野ばん人のように育ち、酒に酔った水夫や漁師、カルタ遊びの人の中で海岸で新年を迎えたのだった。乱暴なのしり声のほかは、何も聞かなかった……。わがソビエトの子供がしあわせなのは、うれしいことだ！(14)

パパーニンは1894年生まれ、カターエフは1897年生まれ、ヴィシネフスキイは1900年生まれ、オストロフスキイは1904年生まれ……。革命や国内戦は彼らの目の前を過ぎて行き、30代や40代となった彼らの前では、スターリンの独裁国家が輝きを放っていた。パパーニンが北極で生活したのは、まさにそのような時である。

まとめ

北極で生活したパパーニンは、スターリン体制下のソ連で英雄となった。とはいえ、彼は別の高みにある超人としてではなく、国民と同じ立場の同志として、ソ連で表象されることとなった。

イサコフスキイの詩にあるように、世界の高みに位置するのはスターリンなのであり、パパーニンは国民と同じ場所で、クレムリンの差し伸べる手を待ち望むこととなる。

ヴィシネフスキイによるパパーニンの伝記では、北極での生活というニークな経験よりもむしろ、革命や国内戦、あるいは革命20周年という、国民と共有しうる経験が強調されることとなった。そこでは北極生活という特異な経験も、革命によって鍛えられたことの結果にすぎない。北極生活はソヴィエトの神話の枠組みに収められ、そのヴァリエーションの一つと化してしまうのだ。そこで顕在化してくるのは、革命によって鍛えられた少年という叙事詩的な主題である。

●注

この論文は科学研究費補助金、若手研究(B)「スターリン時代を中心としたソヴィエト文化における「こども」イメージの研究」(2005-07年度、17720055)による成果の一部である。

- (1) К. Кларк. Сталинский миф о «великой семье»// Соцреалистический канон. СПб., 2000. С.785. あるいは、同書に収録されたハンス・ギュンターの論文も参照。Х. Гюнтер. Архетипы советской культуры// Соцреалистический канон. С.743-84.
- (2) K. Clark. The Soviet Novel. Chicago, 1981. P.120.
- (3) イタリア・ソ連合作映画『赤いテント』(1970)は、このエピソードをもとにしたものである『鶴は飛んでゆく』(1958)でカンヌ映画祭グランプリを受賞したミハイル・カラトゾフが監督し、ショーン・コネリーがアムンセ

- ンを演じている。当時、若手俳優だったニキータ・ミハルコフも、ノビレ救出に向かうソ連隊の一員として出演している。
- (4) 岩上安身、片岡みい子、古田光秋、正垣親一『ソ連と呼ばれた国に生きて』JICC 出版局、1992年 (<http://www.hhiij4u.or.jp/~iwakami/ussr5.htm>)。
- (5) Л. Исаковский. Четыре товарища// Правда. 18 марта 1938. С.3. なお、この詩にはヴァノ・ムラデリ (1908-1970) の作曲によるメロディーが付されている。
- (6) В. Вишневский. Герой советского союза Иван Дмитриевич Папанин. Л., 1938. С.19.
- (7) В. Перцов. Всеволод Вишневский. Александр Довженко. Л., 1969. С.4.
- (8) В. Вишневский. Указ. соч. С.20-21.
- (9) Там же. С.7.
- (10) Там же. С.13.
- (11) Там же. С.4.
- (12) パパーニン『パパーニンの北極漂流日記』押手敬訳、東海大学出版会、1979年、226頁。
- (13) В. Вишневский. Указ. соч. С.3.
- (14) パパーニン、前掲書、245頁。

●英文タイトル

Papanin's Drifting Station and Its Literary Images

●英文要約

In this paper we discuss the literary images of Ivan Papanin, who lived at the north pole and became a great hero of Soviet Union during the Stalin era.

Isakovskii's poem "Four Comrades" emphasizes the unity of Papanin and the Soviet people; on the other hand, the leader, Stalin, rescues them all from their crisis.

Vishnevskii's biography of Papanin emphasizes not the research at the North Pole, but the Civil War, in which Papanin participated. His unique experience on the polar ice is substituted for the Soviet myth, in which the youth are strengthened in the Revolution. Through these texts Soviet readers sympathize with Papanin as a comrade, all the more because the texts include the familiar myth of the Revolution.